

【報告②】

町の意味づけの変遷－江戸城との関わりから－

田原 昇*

目次

はじめに

- 1 通り町筋における町人地の成立－日本橋の殷賑－
- 2 明暦の大火－火除地の設置－
- 3 大火後の繁華－築地の賑わい－
- 4 日本橋と京橋～新橋－繁華の意味合いのちがいを
- 5 賑わいのちがいの再確認－沽券絵図と番付から－

おわりに

はじめに

従来から江戸町人地の成立事情は、江戸城への人員や物資を確保するため、幕府が江戸市中に商人や職人をいかに居住させていったかという視点で語られてきた。そして大体において、日本橋から京橋、新橋へと続く「通り町筋」が、江戸町人の居住地の典型として採りあげられてきた。事実、江戸の町人地は江戸全体の16%にすぎず、大部分が江戸城大手門前の大名小路に平行して展開した通り町筋にひしめていた。また、この通り町筋は江戸の目抜き通りとして栄え、明治以降も日本橋の金融街や銀座の煉瓦街、新橋ステーションに象徴される東京のメインストリートとして展開した。よって通り町筋を江戸東京における町人地の典型とする見方に異論はない。

しかし同じ街路沿いとはいえ、南北ではその来歴に大きなちがいがある。日本橋一帯から京橋以北までの地域（日本橋地域）は、江戸開府以前から拓けた土地で、しかも江戸城の正門である大手門や大奥への通用門である平川門の間近である。一方、京橋以南から新橋までの地域（京橋～新橋地域）は、江戸開府後に入江を埋め立てて成立した新開地であった。当然、通り町筋の町々は、必ずしも一様に発展したわけではなく、土地ごとに特色をもって変遷してき

*当館講師

¹⁾た。にもかかわらず、通り町筋の様子を検討する際、江戸東京を通じてこの地域全体を一つのものとしてとらえるきらいがあった。

そこで本報告では、江戸時代を通じて江戸を代表する町人地であった通り町筋の町並みの有り様について、とくに江戸城との関わりから検討し、近代以降も継続した通り町筋の「賑わい」の意味について言及する。この際、随筆や地誌などの文学作品から通り町筋に関する記述をできるだけ多く取り上げ、日本橋地域と京橋～新橋地域との「繁華」のちがいを対比しつつ考えていきたい。²⁾

今回、シンポジウム「日本橋・銀座・汐留ーにぎわいの街」に際し、上記の疑問に答える機会を得たのでここに報告する。

1 通り町筋における町人地の成立ー日本橋の殷賑ー

太田道灌の江戸築城にはじまり、小田原北条氏の時代には南関東の要衝として栄えた江戸は、天正18年（1590）、徳川家康の関東下向以降、急激に発展した。そして慶長8年（1603）、家康が将軍宣下を受けると、江戸は天下の「惣城下町」として、諸大名総動員で天下人にふさわしい巨大な町づくりが展開する。とくに寛永年間（1624～1644）に江戸城が拡充され参勤交代が制度化すると、江戸城や大名屋敷にむけた労働力や消費物資の需要が急増し、これを提供する町人人口も増加した。当初約300町ほどであった江戸の町数は、元禄年間（1688～1704）には約800町、延享年間（1744～48）には約1670町にまで増加していく。

こうした草創期の江戸で、真っ先に成長したのが日本橋地域である。中世以来、江戸から浅草をへて奥州へと結ぶ道筋が「本町通り」として整備され、後の日本橋繁栄の基となる。その後、日本橋の創架や日比谷入江方面の埋立が進展し、芝から東海道へと抜ける「通り町筋」が整備され、五街道の起点となった日本橋を中心に町並みが広がっていく。

この日本橋地区の殷賑は、当時の随筆でもすでに述べられている。例えば「慶長見聞集」（慶長19年成立）に「見しは今、江戸町東西南北に堀川有て、橋も多し其数を知らず（中略）然に日本橋を見渡せば、夜となくひるとなく人の立ならびたるは、たゞこれ市のごとし」と記され、日本橋は開府早々から「夜となく昼となく人の立ならびたる」有り様であった。また江戸の町並が、埋立と掘割によって造成されていく様子が「橋も多し其数を知らず」という記述からも確認できる。一方、「慶長見聞集」には京橋～新橋地域の賑わいに関してはとくに記述はなく、なおも同地が開発途上にあつた様子を物語っている。⁴⁾

2 明暦の大火－火除地の設置－

明暦3年（1657）正月18日、本郷丸山本妙寺から出火した火は、江戸城と江戸の東側一円を焼失する大火となる。この大火に対する江戸の人々の衝撃は大きく、明暦の大火を題材に多くの文学作品が創られた。その一つ「むさしあぶみ」（万治4年成立）には、猛火から逃げまど⁵⁾う中橋から京橋付近の人々の様子が克明に描写され、皮肉にも明暦年間（1655～58）における日本橋地域の賑わいを確認する格好の材料となっている⁶⁾。

この「むさしあぶみ」によると「（前略）これによつて中橋、京橋の町人共、きのふの火事のまださめざるにうちそへて、又けふの大火事、これはそも何事ぞや、只今世界は滅却するぞやといふ程こそ有けれ（中略）目の前に京橋より中橋にいたるまで、四方の橋一度にどうと焼落る。（中略）爰にて焼死するもの、をよそ二万六千余人、南北三町、東西二町半にかさなり^{よす}臥累々たるしが、更にあき地はなかりけり（後略）」といった有り様が記録されている。この「二万六千余人」という被害状況から、当時、中橋から京橋にかけて少なくとも2、3万人の人出があった様子がうかがえよう。

さて、大火後に幕府は防災都市として江戸を大改造する。その骨子は江戸城周辺の武家屋敷や寺社、町人地を郊外へ移転し、延焼防止のため広小路や火除地を設けるといったものである。通り町筋一帯にも明暦の大火後から元禄年間にかけて広小路や火除地が設けられた（図表1参照）。これによって江戸は防災を重視した都市に変貌したといわれるが、問題は、これら広小路や火除地がこと通り町筋では享保年間（1716～36）までに屋敷地や町人地へと戻ってしまう点である。これは江戸の都市人口の過密化にともない、防災以上に経済的事情が重視された結果であろう⁷⁾、とにかく日本橋地域と京橋～新橋地域とでは、広小路や火除地が屋敷地や町人地へと復す様子に大きなちがいが見受けられる。

例えば、明暦年間に呉服橋御門界隈に成立した広小路は、大火前には幕府医師半井驢庵の拝領屋敷地や入堀であったが、広小路が設置されてから遠からず、元禄年間には幕府医師太田道寿や幕府呉服所三島祐徳の拝領屋敷となり、残りは町人地となる⁸⁾。また、元禄年間に数寄屋橋御門界隈に成立した火除地は、慶長年間（1596～1615）には織田有楽斎の屋敷地もしくは御数寄屋坊主の組屋敷であったというが、後に有楽ヶ原と呼ばれる明地となり追々町人地となった。その後、元禄年間に火除地となるが、宝永年間（1704～11）には再び町人地に復している。

他にも、元来、中橋下の入堀を正保年間（1644～48）に埋め立てて成立した広小路は、享保年間から次第に蔵地となり追々町人地と化している。また京橋の南は、明暦の大火以前、金六町・水谷町といったが、大火後に広小路とされ、その後再び町人地に復した。そして享保3年（1718）に再び明地となるが、同13年に一部が白魚役を勤める網役12人への拝領屋敷地となり、残りがまた金六・水谷両町に復している。

このように大火後の防災計画により、通り町筋に多くの広小路や火除地が設けられたが、そ

〔図表1〕通り町筋における広小路・火除地の変遷

呉服橋御門界限	慶長年間	半井驢庵屋敷		大工町?	通三丁目	入堀	
	寛永年間	↓		↓	↓	↓	
	承応年間	↓		↓	↓	↓	
	明暦大火以前	↓		大工町	↓	埋立	入堀
	明暦年間	↓		↓	↓	↓	↓
延宝年中	広小路						
元禄十一年	道寿屋敷	三嶋屋敷	数寄屋町	尾張町一丁目代地	新右衛門町	本材木町三丁目	
元禄十二年	↓	↓	↓	通三丁目	↓	↓	
享保年中~文久二年	↓	↓	↓	↓	↓	↓	
現行	八重洲一丁目		八重洲一丁目・日本橋二丁目	日本橋二~三丁目	日本橋二丁目		

元中橋界限	正保年中以前	入堀			
	正保年中	埋立			
	延宝年中	中橋広小路			
	元禄年中	↓			
	享保五年	中橋広小路/倉地		↓	入堀/河岸
	享保十五年	明地/倉地		↓	↓
	元文三年	追々町屋	↓	埋立町屋	↓
	安永三年	↓	↓	↓	↓
	天明五年	↓	町屋	↓	↓
	天明七年	北槇町	富槇町	中橋広小路町	↓
天保三年	↓	↓	↓	↓	
弘化二年	↓	↓	↓	新肴場三郎兵衛請負地	
文久二年	↓	↓	↓	↓	
現行	八重洲二丁目・京橋一丁目		京橋一丁目		

鍛冶橋御門界限	寛文年中以前	長崎町	南伝馬町二丁目	入堀	
	寛文年中	↓	↓	入堀/広小路	
	明暦大火以前	↓	↓	↓	
	延宝年中	広小路		↓	
	元禄三年	南大工町	通三丁目代地	松川町一丁目	本材木町六丁目
正徳二年	↓	南伝馬町二丁目	↓	↓	
享保五年~文久二年	↓	↓	↓	↓	
現行	八重洲二丁目・京橋二丁目		京橋二丁目		

京橋界限	明暦大火以前	与作屋敷?	金六町一丁目	水谷町一丁目	金六町二丁目・水谷二丁目
	明暦大火後	火除地			
	延宝年中	与作屋敷	金六町一丁目	水谷町一丁目	金六町二丁目・水谷二丁目
	享保三年	明地			
	享保十三年	与作屋敷	白魚屋敷(西)	金六町	水谷町
宝暦七年~文久二年	↓	↓	↓	↓	↓
現行	銀座一丁目				

数寄屋橋御門界限	慶長年中	織田有楽斎屋敷or御数寄屋坊主組屋敷				尾張町	三十間堀河岸
	元和年中	有楽ヶ原				尾張町一丁目	↓
	寛永年中	数寄屋町	数寄屋町/新右衛門町	新右衛門町	鍵屋町/新右衛門町	↓	↓
	寛文年間	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	延宝年中	↓	↓	↓	↓	↓	↓
	元禄年中	(火除地)					
	宝永年中	元数寄屋町一丁目	元数寄屋町二丁目	元数寄屋町三丁目	元数寄屋町四丁目	尾張町一丁目新地	三十間堀五丁目
享保九年~文久二年	↓	↓	↓	↓	↓	↓	
現行	銀座五丁目						

※本表は、幕府普請奉行編「御府内沿革図書」(『江戸城下変遷絵図集』(原書房、1985~87年)として刊行)を中心として、東京市日本橋区役所編『新修日本橋区史』(1937年)、東京市京橋区役所編『京橋区史』(1937・42年)、東京市役所編『東京市町名沿革史 復刻版』(明治文献、1974年)、竹内誠編『東京の地名由来辞典』(東京堂出版、2006年)より作成した。

れらは元禄年間までに概ね屋敷地や町人地に復している。その際、日本橋地域は、広小路や火除地が設けられる以前も以後も、拝領屋敷や蔵地など幕府御用に関する敷地に供される傾向がみてとれる。一方、京橋～新橋地域は、以前も以後も概ね町人地となっている。このちがいは両地域の特色の表れと考えられる。すなわち、前者が大手門や平川門に近接する地域であるのに対して、後者がそうではなかったという差から生じたのであろう。⁹⁾

3 大火後の繁華－築地の賑わい－

こうして通り町筋は、大火後に広小路や火除地が置かれ、その後、再び屋敷地や町人地に復帰するという変遷をへたわけだが、この時期における様子は、つぎの通りである。

「江戸名所記」（寛文2年成立）には、明暦の大火からわずか数年で往時の殷賑を復活させた日本橋地域の様子が述べられている。¹⁰⁾これによると「橋の長さ百余間、北みなみにわたされし橋の下には、魚舟楨舟数百艘、こぎつどひて、日毎に市をたつる、橋のうへよりみれば、四方晴て景面白し、北に浅草、東叡山みゆ（中略）されども橋のうへは、貴賤上下のほる人くだる人、ゆく人帰る人、高のり物人の行通ふ事、^{あり}蟻の熊野まゐりのごとし」とある。橋の上はもちろん橋の下までも「魚舟楨舟数百艘」といった賑わいぶりで、水郷都市江戸の面目躍如といった様子が記されている。

一方、京橋～新橋地域の記述はあいかわらず見あたらない。が、代わってその東方、築地西本願寺界限の賑わいに関する記述が目立ち始める。「江戸名所記」でも「しかるに西本願寺は、もとは浅草御門のうちにありしを、酉のとしの回禄以後は鉄炮津にうつされ、海をつき出して^{ちぎょう}地形とせり、はじめは人の家居とをく立はなれて、いとゞさびしかりけるを、江府御はんじやうのしるしには、ほとなく人の家たちつゞきて、今はこの寺まことに絶景の地となれり」と記されている。¹¹⁾浅草横山町にあった京都西本願寺の別院が、明暦の大火後に築地に移転させられ築地別院（築地本願寺）となった。この築地本願寺の移転が、隅田川河口部の西岸を埋め立て新地として成立した築地の発展を牽引したのである。こうして日本橋地域の賑わいは、通り町筋沿いに南西へとはのびず、八丁堀から隅田川にそそぐ堀割の出入り口付近へと南東にのびていくこととなった。¹²⁾

つぎに、「江戸雀」（延宝5年成立）で、明暦の大火から20年後の状況を確認してみる。¹³⁾日本橋地域については「右町中に諸商人諸職人其数はかりがたし」として、あいかわらずの繁華が述べられている。また、築地本願寺界限も「御当家繁栄いやまし、かゝる築島のはてまでも軒に軒をかさね、今は江府満中になりぬ」とされ、「今は江府満中」となったその繁盛が記されている。

そしてようやく「江戸雀」に、京橋～新橋地域に関する記述が確認できる。すなわち「通銀座町東うしろ三拾間ほり、此通を南へ行に、一丁めより八丁めまで有、材木町がし也、一丁め

にきのくに橋有、四丁め五丁めに橋有、木挽町と向ひ合也、右之分町人の家居なり、新道よこ町にも諸商人諸職人有之、しるすに及ず」として、通り町筋の東方に三十間堀をはさんで木挽町まで町並みが続き、その新道横町で生活する「諸商人諸職人」の様子が記されている。この頃になると「諸商人諸職人」が住居（「家居」）として京橋～新橋地域に集まってきている様子がうかがえる。「市のごとし」「日毎に市をたつる」というように市場や盛り場として描写される日本橋地域の繁華とは質の異なる賑わいであった。

4 日本橋と京橋～新橋一繁華の意味合いのちがい

以上のように両地域は、成立事情のちがいから異なった賑わいぶりをしめすようになった。そして、その賑わいを比べると、京橋～新橋地域よりも日本橋地域の賑わいの方が際だっているように感じられる。「江戸繁昌記」（天保年間成立）でも「日本橋は江戸の中央に当る。一都の太極、兩岸に剖分す。四方の道程、是より算出し、八方の人戸、是より建つ」¹⁴⁾とあり、「江戸の中央」を誇る「日本橋、を中心とした殷賑に紛れもない。

対して京橋～新橋地域はというと、とくに寂れていたわけではないが、日本橋、のように賑わいの象徴となるものがなかったのも事実である。例えば「江戸名所図絵」（天保年間成立）でも、「采女が原」「木挽町芝居」「新橋汐留橋」「尾張町 布袋屋・亀屋・恵比須屋呉服店」などの賑わいが、図絵、として挿入されている。が、具体的な繁華に関する描写は「采女が原」の「木挽町四丁目より東の方、このところに馬場あり。つねに賑はしく、講釈師・浄瑠璃の類、軒を並べて、行人の足をとどむ」¹⁵⁾（後略）」という一文のみである。

また、嘉永年間に下谷根岸の旧幕臣の家に生まれた田島象二は、晩年に記した「五十年前の東京」で、つぎのように述べている。¹⁷⁾

（前略）尾張町を経て新橋に進むに従ひ一步は一步より場末の景状となり、新橋橋畔には草履、草鞋を店頭で吊せし立場の茶店然たる陋屋さへありき、而も新橋は府の内外の堺にして其橋は纔か二間の粗造木橋なりしなり、蓋しその西方に土橋のありしを想はゞ如何に場末の風光なりしかを知るに難からず、而して当時より連綿たる商家は大通りに於て針屋の美寿屋、丸八の松沢、糸屋の布袋屋、足袋屋の中川、恐らくは之等に過ぎざる可し、大通り街頭にして既に斯の如く蓬家陋屋相連なれり、況や其の左右の裏町に至りては殆ど中流以下の淵叢にして、山下御門内の諸侯及び築地の諸侯中下屋敷又は旗本等を相手とせし小商人労働者等の住居なりき（後略）

すなわち幕末の京橋～新橋地域は、尾張町（現在の銀座四丁目付近）をすぎると「一步は一步より場末の景状」となったという。「大通り」（＝通り町筋）沿いには「針屋の美寿屋、丸八の松沢、糸屋の布袋屋、足袋屋の中川」といった「当時より連綿たる商家」が立ち並ぶとはいえ、おおむね「蓬家陋屋相連」る有り様であった。そして「左右の横町」は、ほとんど「中流

以下の淵叢」で「山下御門内の諸侯及び築地の諸侯中下屋敷又は旗本等を相手とせし小商人労働者等の住居」であったという。

このように、日本橋地域には「四方の道程」の起点となった日本橋という賑わいの象徴があり、大店をはじめ町中に「諸商人諸職人其数はかりがたし」という、まさに「江戸の中央」であった。一方、京橋～新橋地域にも尾張町の「布袋屋・亀屋・恵比須屋呉服店」といった大店や「采女が原」「木挽町芝居」などの名所があったとはいえ、基本的には「旗本等を相手とせし小商人労働者等の住居」で、「蓬家陋屋」が相連なる様子であった。

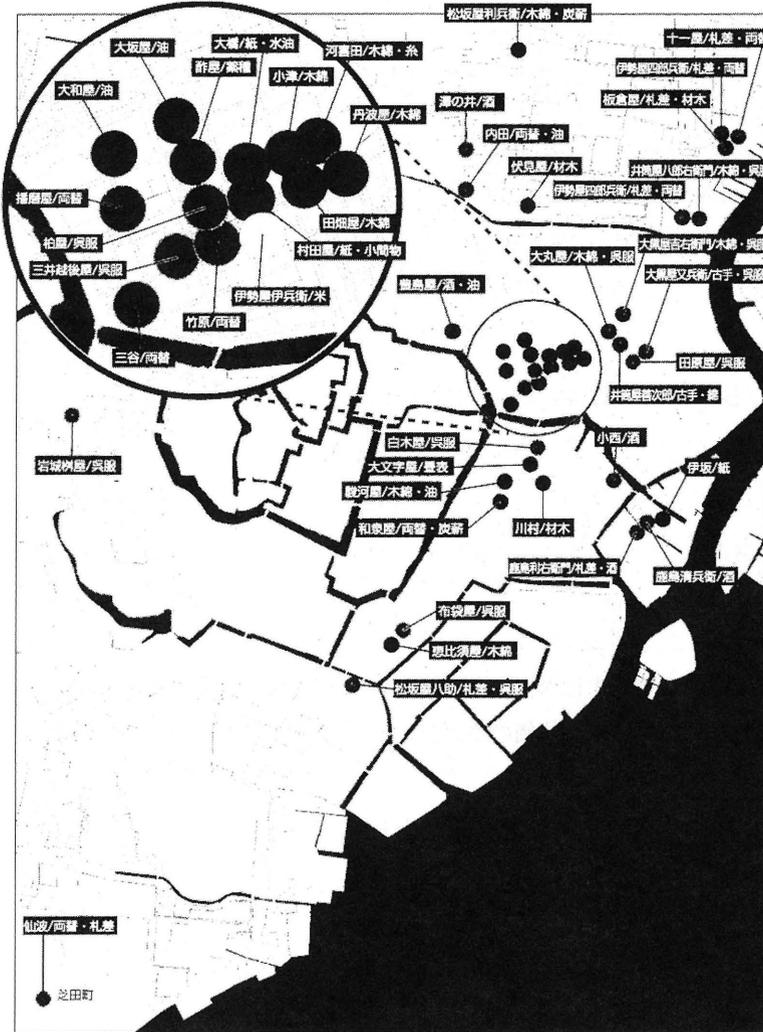
5 賑わいのちがいの再確認－沽券絵図と番付から－

さて、随筆や地誌を利用して、日本橋地域＝「江戸の中央」、京橋～新橋地域＝「小商人労働者の住居」といった賑わいのちがいを浮き彫りにしてきた。こうした状況は、他の史料でもうかがえる。例えば玉井哲雄氏は、延享の沽券絵図を利用して18世紀中期の通り町筋の小間高（＝地価）を明らかにしている。それによると、①京橋～新橋地域よりも日本橋地域の方が一般的に地価がかなり高く、②両地域内では当時の目抜き通りであった本町通り・通り町筋に面した町屋敷の地価が高く、③日本橋川や三十間堀など堀割に面した河岸地が高いといった傾向があったという。¹⁸⁾①に見られる地価の格差は、まさに両地域の賑わいのちがいに合致して興味深い。また、②は京橋～新橋地域でさえ「当時より連綿たる商家は大通りに」あった有り様を、③は京橋～新橋地域に先駆けて、堀割の出入り口にあたる築地本願寺界隈が拓けた所以とそれぞれ合致する。

また大店の分布を見てみると、こうした状況がより鮮明となる。図表2は江戸時代後期に成立した長者番付¹⁹⁾から、江戸における大店の分布を図示したものである。一瞥してわかるとおり、日本橋地域に多くの大店が集まり通り町筋を南にいくにしたがってその数が減っていく。まさに日本橋地域＝「江戸の中央」、京橋～新橋地域＝「小商人労働者の住居」といった有り様がうかがえよう。

おわりに

以上、通り町筋の様子を、随筆や地誌といった文学作品から時代ごとに確認し、その有り様の変遷をおってきた。まとめると、日本橋地域は江戸開府以前から拓けた土地で、江戸城正門である大手門や大奥への通用口である平川門に近く、御用商人など幕府御用を勤める商人や職人が住まう街であった。このため、日本橋地域には拝領屋敷が多く置かれ、明暦の大火後に設けられた広小路や火除地も、多くが御用商人などの屋敷地に復したわけである。だからこそ、江戸時代を通じて「日毎に市を立つる」日本橋を中心に「江戸の中央」として繁栄し続けたわ



〔図表 2〕 大店分布図

けである。

対して京橋～新橋地域は、江戸開府後に暫時埋め立てられて成立した後発の街であった。よって、元来はほとんどが町人地で、大火後に設けられた広小路や火除地も、遠からず町人地に復したわけである。しかも、埋立にともない日本橋地域の賑わいが京橋～新橋地域へと順調に南下してきたわけではない。むしろ、この両地域に張りめぐらされた堀割が隅田川へと抜ける出入口であった築地地域こそ、京橋～新橋地域に先駆けて賑わった。そして京橋～新橋地域は、この築地地域に集う人々や江戸城前の大名や旗本屋敷の人々を相手とした「小商人労働者等の住居」となっていた。だからこそ、尾張町の布袋屋・亀屋・恵比須屋など、一部の大店を除けば「蓬家陋屋」が建ち並ぶといった有り様であったわけである。この合間に「采女が原」「木

「挽町芝居」の賑わいがあったとしても、それは一時的な盛り場としてのものであったようである。

最後に、北から南へと変化する通り町筋の賑わいのちがいをよく表した2つの川柳を紹介して本報告を終えたい。²⁰⁾

日本ばしどこへゆこふがすきな所コ

おわり町通りぬけるとしつ^街かなり

【註】

- 1) 本報告では、通り町筋の概要について、とくに断らないかぎり、つぎの文献・論文を主に参照した。三浦俊明「江戸城下町の成立過程－国役負担関係を通してみた町の成立について－」（『日本歴史』172、1962年）、西山松之助・他編『江戸学事典』「日本橋」「京橋」「神田」「芝」の各項（弘文堂、1984年）、玉井哲雄「江戸 失われた都市空間を読む」（平凡社イメージリーディング叢書、1986年）、玉井哲雄「本町通りから日本橋通りへ」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅰ空間、東京大学出版会、1989年）、吉田伸之「江戸・檜物町」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅱ町、東京大学出版会、1990年）、伊藤毅「江戸の新地と再開発」（高橋康夫・他編『図集日本都市史』、東京大学出版会、1993年）、『参勤交代－巨大都市江戸のなりたち－』（東京都江戸東京博物館、1997年）、『江戸開府400年・開館10周年記念 大江戸八百八町展』（東京都江戸東京博物館、2003年）。
- 2) 通り町筋の町々における「地域格差」については、玉井哲雄氏が前掲註1『江戸』158～177頁「江戸町の繁栄と地価高騰－地域格差の発生－」で「地価」に注目してくわしく検討している。この点については第5節で改めて検討したい。
- 3) 「慶長見聞集」（『江戸叢書』巻の二、日本図書センター、1980年）「日本橋市をなす事」。
- 4) なお、日本橋と京橋の創架は慶長8年（1603）ごろと推定されているが、新橋の創架年代は不詳である。くわしくは前掲註1『江戸学事典』参照。
- 5) 外堀と楓川を東西につなぐ堀にあった橋。日本橋と京橋の中ほどにあったため中橋と名づけられた。後にこの堀割は埋め立てられ、中橋広小路となった。図表1参照。
- 6) 「むさしあぶみ」（『日本随筆大成』〈第三期〉6、吉川弘文館、1977年）。
- 7) 前掲註1伊藤論文215頁参照。
- 8) なお「御府内備考」によると、三島屋敷と道寿屋敷に近隣の檜物町会所屋敷をあわせて三会所と呼ばれたという。また、三島屋敷と道寿屋敷は、元禄11年（1698）に町地に編入されている。くわしくは、前掲註1吉田論文172頁参照。
- 9) この点については、第4節で再び取り上げたい。
- 10) 「江戸名所記」（『江戸叢書』巻の二、日本図書センター、1980年）「三、日本橋」。
- 11) 「江戸名所記」（前掲註10同書）「六、西本願寺」。
- 12) 日本橋地域・京橋～新橋地域と築地地域との賑わいの関係については、第5節で改めて検討する。
- 13) 「江戸雀」（『日本随筆大成』〈第二期〉10、吉川弘文館、1974年）。
- 14) 寺門静軒著、朝倉治彦・他校注『江戸繁昌記』1～3（『東洋文庫』256・276・295、1974～1976年）「日本橋魚市」。
- 15) 市古夏生・鈴木健一校訂・編集『新訂江戸名所図絵』1（ちくま学芸文庫、1996年）「采女が原」。
- 16) 明治の著述家・新聞記者。任天・醉多道士・生成山房主人などと号し、『團々珍聞』記者、『読売新聞』特別寄書家、『新愛知』主筆、『上野日々新聞』記者を歴任。明治42年没、享年58歳。くわしくは註17同書参照。

- 17) 田島任天「五十年前の東京」(平岡敏夫監修・解説『明治大正文学史集成』付録1「私の見た明治文壇」(日本図書センター、1982年)に「田島任天翁の遺著」として所収)第3節「京橋新橋間」。
- 18) 前掲註2 玉井「江戸町の繁栄と地価高騰—地域格差の発生—」を参照。なお、表現・用語などは本報告にあわせて適宜改変した。
- 19) 江戸東京博物館所蔵「新板大江戸持○長者鑑」(資料番号88206349)。なお図表2は、前掲註1『八百八町展』144頁所収の図28を一部改めて転載した。
- 20) 『川柳江戸名所図絵』(至文堂、1970年)50～97頁「中央区」参照。